シリーズ 26

AG5だより

日本人学校・補習授業校を応援します！

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業

AG5の2019年度の成果

AG5運営指導委員会委員長・明治大学特任教授　佐藤郡衛

文部科学省の委託事業である「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」（AG5（Advanced Global Five）プロジェクト）を開始して３年を終えました。ここでは2019年度の成果を報告します。評価の観点は昨年同様、①学校全体で取り組んでいるか、②教師の実践力の向上につながっているか、③子供の学習成果が向上しているか、④その取り組みを通したモデルカリキュラムやプログラムの開発ができたか、です。最初に、いまでは７つに増えた各プロジェクトが「どう進んでいるか」「どんな成果があったか」を紹介します。詳細はAG5のポータルサイト（https://ag-5.jp）をご参照ください。

研究テーマ1．日本人学校における高度グローバル人材の基礎的資質形成のためのプログラム開発

香港日本人学校香港校小学部を対象にグローバルな能力を育成するための実践に取り組んでいます。「グローバルクラス」を開設したのは二〇一六年ですので、四年目に入りました。このクラスの特徴は算数、理科、図工を英語で行う「英語イマージョン」、探究学習を核にした「グローバルスタディーズ」の取り組みです。私たちが懸念していたのは英語力が多様な子供たちが算数や理科を英語で学習すると学力がつくのか、学力のばらつきが出てくるのではないかということでしたが、この懸念は払拭されました。標準学力テストの結果をみても香港日本人学校の他のクラスの結果と遜色のないものです。

香港日本人学校の実践で一九年度に目指したのは「グローバルスタディーズ」の成果をまとめ、他の学校に普及するという作業でした。同校の先生たちで「グローバルスタディーズ単元デザインの手引き」を作成していただきました。小学四～六年生で学ぶトピックと中心概念が整理され、トピックはSDGsと関連づけられています。SDGsには、国連の加盟国一九三カ国が一六～三〇年までに達成すべき一七の目標が掲げられています。日本国内の学校でも取り組むべき重要な課題です。

この成果は大変貴重ですが、当然ながら学校の置かれた環境に大きく依存します。取り上げられるトピックは学校ごとに違うこともありますし、トピックが違えば中心概念も変わってきます。そこで三年間の取り組みをもとに「探究学習のカリキュラム開発」を行っています。これは、探究学習の目標、内容構成、教材、学習活動、評価などについて具体的な指針を示すものです。

こうした指針をもとにシンガポール日本人学校とパリ日本人学校でも探究学習の実践を始めました。シンガポール日本人学校小学部ではESD（持続可能な開発のための教育）を中心に、「探究科基礎」を実践しています。またパリ日本人学校でも「水」をテーマにした総合学習を行っていますので、現在取り組んでいる「探究学習のカリキュラム開発」をもとに、各学校で研修を行いました。

新しい試みを実践していくのは先生たちです。探究学習はこれまでの教科学習とは異なり、内容や方法も違いますので、先生たちの理解を深め、どう実践するかについて共有化を図ることにしました。

研究テーマ2．日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発

台北日本人学校、台中日本人学校、高雄日本人学校で日本語指導のプログラム開発を行ってきました。この三年間で本プロジェクトが目指していた日本語指導プログラムの開発という当初のねらいは達成できたと思います。その成果として、『日本人学校における日本語補習のための学習活動案集―台北日本人学校の実践から』を刊行しました。台北日本人学校での実践をもとに、日本語指導が必要な子供に対し、小学校低学年のうちに学習するための日本語力をしっかりつけることを目指したものです。より汎用性の高い内容にして算数、国語、生活科でつまずきやすいところ、支援すれば在籍学級の学習に参加できるところ、今後の学習の基礎になるため確実に押さえておきたいところを取り出し、指導方法をわかりやすく示しました。一年生二十時間分、二年生二十時間分の単元を収めています。日本人学校では日本語指導が未経験の先生が教えるケースが大半ですので、その場合でも指導できるよう工夫されています。

台中日本人学校では在籍学級での

日本語指導の視点を取り入れた授業について実践していただきました。その成果も冊子として刊行する予定です。

一九年度は新たにマニラ日本人学校、大連日本人学校、青島日本人学校でも実践しました。マニラ日本人学校では、日本語学級のプログラム開発を開始しました。マニラ日本人学校は週一回放課後に、小学一～六年生を対象にした日本語学級を実施しています。この日本語学級と在籍学級とが連携した効果的な指導方法の開発について検討を行っています。

大連日本人学校では在籍クラスでの日本語指導の視点を取り入れた授業を行っています。一・四・六年では在籍学級の国語科の授業で、視覚的な支援や表現支援を重視した日本語指導を取り入れて行いました。

また青島日本人学校では、「課外の日本語教室」「取り出しによる個別の日本語指導」「在籍級での日本語指導」に関する取り組みを行いました。担任の先生と日本語指導の先生が連携し、教科内容についてあらかじめ学習したりわからないところを補充したりする実践を行っています。

今年度、私たちが大きな期待をかけたのがマニラ日本人学校を会場にした日本人学校の先生方の合同研修会です。あいにく新型コロナウイルスの影響で中国、台湾の一部の先生が来訪できなくなる事態になりましたが、Zoomシステムを活用し、フィリピン人の児童生徒が多く住む浜松市の指導主事にも参加していただき実施しました。日本国内とは事情が異なるので、日本人学校の合同研究会は意義があると思います。

研究テーマ3．補習授業校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発

ダラス補習授業校を対象にしたプロジェクトは、この三年間で大きな成果がありました。小学校の中学年から開始した単元開発を小学一年から中学生段階までの全学年で行うことができました。本単元は、日本語力も英語力も多様な子供たちが共に学び、その成果を日本語で発信できるようにするためのもので、教科横断型の内容です。実際に、子供たちは授業に積極的に参加し、日本語での表現力は確実に向上しています。

本プロジェクトは補習授業校の先生方に大きな影響を与えつつあります。新しい取り組みはどう始めていいかわからないというのが実情で、それが足かせになっています。そこで、まずはダラス補習授業校の先生が授業をWEBで公開し、他の補習授業校の先生も交えて振り返りを行ってきました。一八年度はオースチン、クリーブランド、コロンバスOH、シカゴ、シンシナティ、セントルイス、ワシントンDCなどの補習授業校の先生方と一緒に研究を進めました。今年度は実践を共有するために参加校を増やし、現時点（二〇年二月）では、三十五校、八十六名の先生が参加しています。補習授業校のコンソーシアムが構築されつつあります。補習授業校には優秀な先生が多くいますが、こうした力量のある先生のネットワークをつくり、相互に課題を解決できるようにしていくことを目指します。

研究テーマ4．南米日系人及び現地コミュニティにおける日本語教育・日本型教育・日本文化の発信・普及のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発

本プロジェクトではパラグアイの日系人コミュニティに対して日本人学校がどのような役割を果たせるか、果たすべきかについて、具体の取り組みを通して検討しています。この三年間、継続して実施しているのが、「アスンシオン日本人学校の先生によるアスンシオン日本語学校での国語や日本語の指導に関する合同研修会」で、一九年度はイグアス等の日本語学校でも行いました。また、一八年度には「移住すごろく」を開発し、一九年度には地域学習のための社会科副読本を作成しました。日本人学校の子供たちの多くは生活空間が限られていて現地についてはあまり知識がありません。そこで役立つのが副読本ですが、アップデートが必要だったので、子供たちの学習に大いに役立つことを期待しています。

また、この副読本では「日本とのつながり」という章を設けてパラグアイへの移住の歴史を取り上げていますが、日本語学校や日系の子供の学習に役立てることをねらっています。漢字にはルビを振り子供たちが学習しやすいように工夫されています。パラグアイには一九六〇年代から七〇年代に移住していった一世の人たちも多く住んでいますので、子供にとって「移民」というテーマは身近なものです。日系人・日本人としてのアイデンティティを形成する一助になることを期待しています。

研究テーマ5．学校図書館を活用した日本文化等の発信のためのプログラム開発

西大和学園カリフォルニア校の取

り組みは、学校の持つリソースを地域に開放して日本文化や日本語の学習に役立ててもらい、親日的な人材を育成することを目指すものです。一九年度も、日本文化を発信するイベントで関連する図書などの開放を行いましたが、そのような貸し出し方の有効性がわかってきました。

そこで、多様な図書の貸し出しを行いました。オレゴン州ポートランドへはけん玉を添えて、また中学生の交流活動では読み聞かせ音声付きのものを用意しました。さらにトロント大学の中島和子教授の講演会や地域住民にお茶を披露した際にも、また近隣にある日系人のシニアの人たちとの交流時や「日本文化祭」等でも図書を貸し出しました。これらのイベントへの参加者数は二二一人に達し、着実に成果を上げています。

また、近隣で日本語を教えている現地校の先生方への情報や資料などの提供も一八年度から引き続き行いましたが、先生方のニーズが明らかになってきました。「生徒の日本語レベルによっては自分で読めないので、英語で解説しながらの読み聞かせが効果的」「簡易な日本語で書かれている図書より、日本文化に関する図解付きの辞典を用いて話題や発話の機会を作り出す指導をした」「私立の中学高校では図書を活用した授業を比較的自由にできる」「大学ではさらに自由にできる」などの意見が上がっています。公立の中学高校を対象にするよりも、私立や大学を対象にすることでこの事業が広まっていくという見解です。今後の事業展開に役立つ内容が明らかになっています。

研究テーマ6．ICTを活用した遠隔での教員研修及び授業実践のプログラム開発

本プロジェクトは一九年度から始めました。まずは、サンパウロ、リオ・デ・ジャネイロ、アグアスカリエンテス、サン・ホセの四つの日本人学校合同で先生方のICT、遠隔指導などに関する研修会等を実施しました。サンパウロとリオ・デ・ジャネイロのグループでは、教科化された「道徳」と、新学習指導要領の完全実施に伴い必修化された「プログラミング」についての遠隔合同授業が実施されました。両者とも指導方法に関しては喫緊の課題ですが、教師の専門性を生かしたリーダーシップ溢（あふ）れる実践がみられました。

またアグアスカリエンテスとサン・ホセのグループは、子供たちの発信力の向上を目指して交流会の遠隔合同授業を実施しました。異なる環境下で学ぶ子供同士の多様な意見交換は意味がありますが、子供たちの中に「積極的に発信していこう」とする姿勢の芽生えがみられました。

一方、遠隔授業を円滑に行うには、Wi-Fi環境、ICT機器の活用など課題も多いため、実証的実践を行い、次年度以降の課題を抽出しました。

研究テーマ7．日本人学校における特別支援教育に関する遠隔指導実施に向けた実践的研究

特別支援が必要な子供を帯同しての海外赴任が増加している中、一九年度から開始されたプロジェクトです。日本人学校が発達障害等の児童生徒の受け入れに前向きに取り組めるよう、国立特別支援教育総合研究所と共同で遠隔指導システムの開発に取り組んでいます。

筑波大学附属大塚特別支援学校や東京都立調布特別支援学校の協力をいただき、ハノイ日本人学校と北京日本人学校において遠隔アプリ「V-Cube」等を活用して学級支援を試みています。

一九年度は、システム環境を整備し、指導支援対象者への指導方法等に関する教員研修を支援学校による遠隔会議等を通して実施しました。

新しい取り組みを進めるには

本プロジェクトも折り返し（五年を想定）を過ぎ、他校への普及を図っていく必要があります。二〇年度はヨコ展開を進め、多くの日本人学校等で実践可能なモデルの構築を目指します。そのためには次の四点が課題です。①新しい教育を進めるための実践に裏打ちされた具体的到達目標の明確化。②適切なガバナンス（日本人学校の先生の任期は原則二・三年。学校の意思決定を行う運営委員も一年単位で代わるのも珍しくなく、「継続」にはマイナス。改革には「継続できる位置づけ」が必要不可欠です）。③成果の評価方法（中でも実践レベルでの評価が大切です。学力といった定量的指標から、思考力や表現力などの伸びはポートフォリオ（成長の記録）などを活用して評価する必要があります。英語力や日本語力などは作文などを通して伸びを評価していきます。ルーブリックなどの評価指標も活用できるでしょう）。④先生方のモチベーション（先生方の主体的な参加が不可欠です）。

共通の目標を持ち、達成のために自ら協働していくことで改革は進みます。その意味でAG5では先生方の研修会をサポートしていく所存です。